

マネージメント情報

黒崎尚敏特別号

2020年3月



Total Herd Management Service

この記事は、機関誌や日常の出来事の中からわれわれが注目した話題を皆様に提供するものです。
ご質問、ご要望などなんでもお寄せくだされば、今後テーマとして取り上げたいと思います。

マネージメント情報 2020年 3月

皆さまへ

予定していた退職記念祝賀会を新型コロナウイルスの感染拡大を受け、中止させていただきました。大変に申し訳なく残念ですが、昨今の状況を踏まえたとやむを得ないことと思っています。1994年6月、THMS（当時は総合牛群管理サービス）の開所式が、経営破綻して夜逃げをした自動車整備工場の工場跡を借り受けて執り行いましたが、突然の豪雨と落雷の大嵐になりました。夜逃げの工場跡で嵐の中の開所式、前途多難な船出とはこのことだなど覚悟したのを思い出しましたが、終わりは、新型コロナのパンデミックとは、全く想像していませんでした。

退職に当たって少しだけ振り返って、お礼の言葉とします。

退職にあたり お礼の言葉

以前から決めていた自身の定年退職年齢である65歳を昨年12月に迎えました。いろいろと、慰留する言葉もいただきましたが、様々な観点からもこれが最も良い選択だと思っています。1996年（平成6年）に開業以来26年間、酪農家はじめ多くの皆様に支えられ今日の日を迎えることができました。

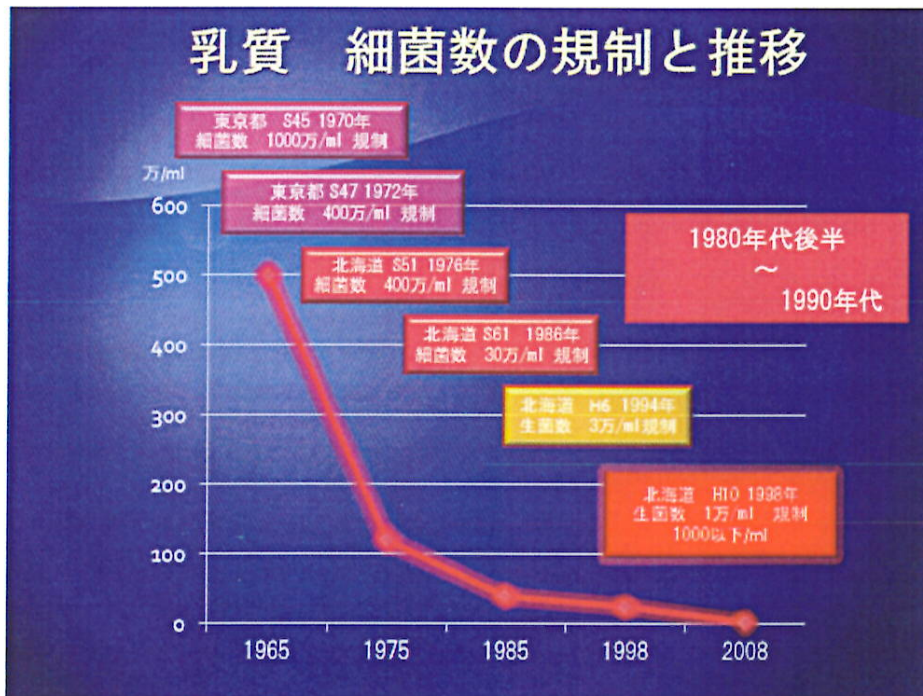
一 憧れのNOSAI獣医師へ

1977年（昭和52年）酪農学園大学獣医学科を卒業し別海町農業共済組合にはいりました。そこで別海支所での新米獣医師としての5年半を過ごし、その後上春別に転勤しました。その時上春別支所にいたさらに新米獣医師が山下でした。その別海と上春時代に知り合った多くの酪農家とそして山下との付き合いが30～40年たった今日も続いていることは、自分としてもっとも誇りに思うところです。

一 農業情勢の悪化とAndyとの出会い、アメリカへ

1980年代に入り、それまで順調な発展を遂げていた酪農業界が急速に厳しい淘汰の時代を向かえました。それまで右肩上がりだった乳価は突然、毎年のように下落を始めたのです。軌を一にするように、厳しい生産調整と乳質規制も始まりました。牛乳に食紅を入れたり挙句は廃棄し、過剰になったバターを酪農家自ら買い取ったりと目を覆うばかりでした。規模拡大が推進され始めていたなか、多くの負債を抱えた酪農家が離農していきました。細菌数や体細胞規制は、その規制をクリアできない酪農家の経営を圧迫しその離農に拍車をかけました。アメリカで行われていたバイアウト（酪農中止計画）などという言葉もこのころ盛んに噂されました。私もNOSAI獣医師として、規制された細菌数や体細胞数を低減させるため農場へ毎朝夕通う日々でしたが、とうとう離農の決断を告げられたときは、酪農家の無念と自分の無力が体の中で爆発するような苦渋を何度も味わいました。無念といえば、この時期、脂肪肝や第四胃変位が発症しまくりました。世界的高エネルギー戦略と飼養環境の変化が大きな要因だったと思います。毎日四変の手術や脂肪肝の点滴をして、その理由もわからず診療に明け暮れていたのもこのころ

でした。それらが層状的に重なって「離農の嵐」が吹きまくりました。そうしたときに、アメリカで乳房炎コントロールをメインに仕事をしているトータルハードマネージメントサービスの Dr. Andrew Johnson 先生を知り彼の講演会や3泊4日にも及ぶセミナーに参加したのが始まりでした。先生からの言葉がすべて体に沁みってくるような感覚で、それらを貪りました。そして38歳のとき、とうとう日本では埒が明かないという焦りにも似た気持ちと、Johnson 先生のような獣医が活躍する国への憧れによって、とうとうアメリカに渡ってしまったのでした。この時、多くの酪農家の皆さんから大きな支援を頂き、「ただでは戻れない」と覚悟したので覚えています。



乳質規制の変遷

—アメリカでの放浪の始まりとラッキー—

これは無謀というほかない突然の渡米でしたが、当時アメリカ飼料穀物協会の伊藤先生のご助力と、大学の同期と後輩によってその道が大きく開けました。伊藤先生は Johnson 先生に私を受け入れて教育するように何度も説得してくれましたし、ボストンにいた大学の後輩は、保富先生といって、当時ハーバード大学の医学研究所でエイズの研究をされていました。オハイオ州立大に留学中だった同期の谷山さん（後、酪農学園大学学長、現、酪農学園大学理事長）に、「ボストンにいるのならよい後輩がいるから」といって、紹介されたのが保富さん（現在、三重大学 医学部教授 および 筑波・霊長類医科学研究センター、センター長）でした。

私はさっそくそれまでのホームステイ先を飛び出して彼のアパートに転がり込み、そこでUSAの運転免許をとって、中古の車を買って全米を放浪するたびに出る準備がととのいました。保富さんの計らいで、会ったこともないハーバード大学の医学部研究所所長の推薦状も書いてもらい、ボストンにある名門タフツ大学に特別聴講生として潜り込むこともできました。ここでスタッフと一緒に診療や検診に行

きました。タフツ大学は私学ですが、ウィキペディアによれば全米で16位にランクされる名門で、学費は通常経費の2~3倍という頭が良くて金持ちしかいけないような大学でした。笑えるのは、ハーバード大学医学部研究所長の推薦状をもって来た私を、日本からの何か重要な人物と勘違いしたのか、打ち合わせに行った日、獣医学部長自ら玄関まで迎えに来てくれ大学中を案内してくれました。



タフツ大学 獣医学部



タフツ大学 ハロウィンで仮装する教授と学生

こうした、重なる幸運に恵まれて何も知らないアメリカでの旅をスタートできたのは、本当にラッキーとしか言えません。それがなかったらと思うと今でもぞっとします。先にも書いた飼料穀物協会の伊藤先生のご助力があって、なんとか Andy に弟子入りすることもできたのです。

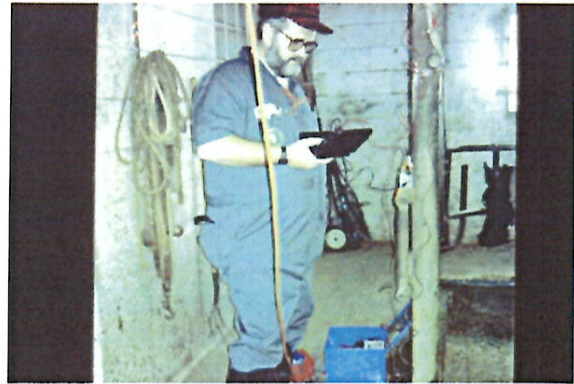
ーアメリカでの放浪

後輩のアパートというベース基地を得て、それまで文献やセミナーで興味を持った先生のところに次々手紙を書いて、訪問の許可をお願いし多くが快く受け入れてくれましたが、やはり Andy の存在が大きかったのだと思います。

Andy の家では地下室に入れてもらいました。地下室といっても、机もシャワーもある広々とした立派な部屋です。地下室は Andy の事務室の真下にあり、彼がおきだして仕事を開始するときはミシミシと音がするので、それに合わせて自分も起きだして勉強を開始する毎日でした。自分も朝6時には事務所で仕事を開始する習慣もこの時身に着けたものだと思います。Andy が一度、コンサルの旅に出ると、地獄が待っていました。朝の搾乳立会をするためにモーテルを3時ころ出ます。そして朝9時くらいに終え、夕方の農場までのドライブが6時間くらいあります。そして夜、搾乳立会とミルク一点検を終えるのが夜の8時くらいです。そしてそこから次の朝の農場近くのモーテルまで数時間ドライブし、ベッドに入るのはいつも11時くらいでした。それが何日も続くのですが、そのドライブの間、私が黙ることは許されませんでした。「アメリカまで勉強に来て黙る時間があるのか」という厳しい教えでした。できない英語で常に質問し、常に叱られていました。よく叱られたことは、「何故おまえはいつもそういう小さな部分しか見られないのだ、もっと根幹を見ろ」ということでした。日本でも仕事で叱られたことがない自分が、毎日英語で叱られていました。夜は夜で「いびきがうるさい」と叱られました。いずれにしても、この過酷な時間が自分を成長させてくれたのは間違いのないことでした。



Andy と..



迷走電流（ストレーボルトテージ）を測定している



Andy の家の地下室に居候



数年前の久しぶりの来日・Andy もすっかり真っ白になっていました。

ーアメリカでの放浪もう一つのラッキー

～Dr. Conner Jameson と デーリーコンプ 305(DC305)との出会い～

カリフォルニアで Dr. Conner Jameson に出会えたのは、もう一つの大きな幸運といってもよいことでした。当時牛群を管理するソフトの多くは、乳検データの分析に主眼を置いたもので、いろいろな PC ソフトが様々な大学から出ていて、その講習会も頻繁にありました。自分もいくつかの講習会に参加しましたが今一つぴんとかなかったのを覚えています。そんな中、コナーに出会い DC305 を彼がもう一人の仲間と開発利用していることを知りました。これは現場から湧き出たアイデアが満載のソフトであると同時にそれまでの PC ソフトでは見たこともないコマンドラインがあって、そこにやりたい仕事をあたかも文章を書くように打ち込むことによって様々なデータを表記できました。そして、それに利用したいコマンドやアイテムを自由に自分で作り出すことができるというものでした。これは本当に衝撃でしたし、これだとおもいました。そして、当時全く新しい繁殖パフォーマンスをモニターする「妊娠率」という概念に基づいたコマンドが多く採用されていました。

自分が仮にこの 26 年間に於いて、日本の酪農に何か一つでも貢献できたかと聞かれれば、「妊娠率」という言葉と DC305 を日本でも馴染みの言葉にできた事と答えます。この DC305 は、1981 年に Dr. Connor

Jameson と Dr.Steve Eicker という二人の獣医師によって開発されたものですが、今やアメリカにいる牛の 60%はこの DC305 の管理下に入り、世界中で利用されるソフトにまでなりました。繁殖研究に関わる様々な発表がこの DC305 からでてきていることは、この利用者であればすぐにわかります。こうしたこともあって、今は日本での DC305 のお世話やサポートはすべて THMS（山下・奥獣医師）が行っています。この DC305 が次々と進化させるのは、世界中の繁殖に関わる獣医師やコンサルタントあるいは大学研究者らがその改善に常に協力しているからです。アメリカでは大学での授業にも DC305 の使い方が登場します。この会社（Valley Agricultural Software:VAS）では、現在専門の研究者らが数十人がかりで毎日世界から寄せられる情報をもとにアップデートされていて、これはもはや日本で作られるソフトではとても太刀打ちできるものでなく、当社がこの一翼を担えたのは、一つの大きな幸運であり誇りでもあります。THMS が今後もそうした歴史を知り貢献していつてくれることを願うばかりです。



DC305 開発者 Connor Jameson 先生
現場に出ることが好きで、DC305 開発後も
農場に頻繁に顔をだしていました



当社主催 DC305 セミナーに何度も駆けつけてく
れました

ーアメリカ放浪 ～様々な獣医師：研究者との出会い～

先にも述べましたが、アメリカでは様々な獣医師やコンサルタントにお世話になりました。写真 2 列目右の Donald Sanders の著書の最初にある、「がんこ病」はとても印象に残っています。酪農家がまず、第一の「がんこ病」感染者であって、それにかんする様々なエピソードがかかれています。そしてその「がんこ病」は牛にも獣医師にもそして最後には自分自身にも感染したと述べて、同様に面白いエピソードが書かれていて、これらを予防修正するのがプロダクションメディシンであるとのべています。その本の名前は「Milk Them・・・ for all Their Worth!」という本です。なんと訳していいのかわかりませんが、NYS から和訳されていて、400 ページ以上にもわたる大作本です。彼の言う「がんこ病」をしっかりと認識することが、プロダクションメディシン（生産獣医療）の「一丁目一番地」であることが理解できます。最後列 2 つの写真は、アリゾナで直腸検査の修行中の写真。当時少なくとも別海 NOSAI の獣医師は授精後 60 日目くらいの子宮を胎膜スリップという方法で妊娠鑑定していました。しかし、アメリカでは、32 日目妊娠鑑定が普通に行われていました。これは子宮を触り胎胞を蝕知して判断しますが、それ

に驚いた自分は「これはいかん」ということで、急遽、大規模繁殖検診が行われていたアリゾナに行って修行することになりました。毎日 400~500 頭やるので、その技術はあっという間にマスターしました。この時、右手でやっていた直検を左手でもできるようにしようと、左右かわるがわる直検していました。ただし、ここでも検診自体は厳しいものです。毎朝 4 時くらいには家を出発して、途中ダンキンドーナツに寄って、朝食代わりにして、フェニックス郊外へ 1~2 時間くらいドライブします。涼しい日の上がる前にはじめ、日の高くなる 12 時くらいまで連続で行います。どの仕事もアメリカでは厳しいものだと自覚させられました。



左：Dr.Don Nailes 当時は獣医師として活躍していたが、今ではウイソコンシンでも非常に有名な高泌乳：高繁殖農場として知られる存在に日本に講演に来ています



Dr. John Ferry : Andy の友人で PM の先駆的獣医師 日本での講演も数回ある



Dr.Boomer 当時カンサス州でコンサルタント獣医師 をしていた 現在は某大手メーカーのコンサルタントとして活躍中



後方左： オハイオ州 Dr.Donald Sanders 奥様も小動物の獣医師

「Milk Them... for All Their Worth」という著書は、日本でも和訳されて出版されている「がんこ病」こそ酪農業界の重大な感染症である



ウィリアムマイナー研究所所長

Dr. Charry Sniffen 先生と。栄養設計プログラム CNCPS の基礎を作った偉大な方、当時からミスター炭水化物といわれ非線維性炭水化物 (NFC) のアイデアも彼からのものです



研究所内で講義をする Sniffen 先生

彼を慕って多くの研究者がマイナーを訪問していました



アリゾナで直検の猛特訓 毎日朝6時から12時まで400~500頭直検する毎日。私はもともと右手直検でしたが、左手もマスターしようと両手で修行、先生のスメイリー先生はほとんど汚れておらずこれが500頭終了後とは今でも信じられません



雨の日も検診は休みません ポンチョを着て雨中の検診終了

—THMS 開業へ

もうお金がないということで、1年と10ヶ月ほどで日本に戻り開業しました。開業は写真にある通り、先にも書いた夜逃げをした自動車整備工場の事務所です。開業当初はそれまでの自分の職場でもあった NOSAI といろいろありました。立場が変われば、こんなにも180度変わってしまうという、現実を初めて知ることになりました。それでも、THMS 最初の顧客であった井出さん、石本さん、片岡さん、宮坂さん、上月さん、中山さんという伝説的な猛者たちが NOSAI と直談判して私どもを守ってくれました。NOSAI そして NOSAI 連合会との直談判 (話し合い) の夜、私と山下はそこに出席は許されず、別海の旅館で待機していました。夜も12時くらいにみんなが「心配ないよ」といってにこにこしながら戻って

きたときの私の彼らへの感謝はこの上ないものになりました。こうした歴史を今の若い獣医師にどれだけ繋げられているのか申し訳ない気分もあります。



THMS 最初の事務所、夜逃げした自動車整備工場事務所跡を間借り
近くの国道でパンクした人が来たり、意味ありげな人が突然訪れたり・・・



最初の相棒は同じ白黒のダルメシアン「ラッキー」
当時、中標津にあった「ムツゴロウ牧場」から分けてもらいました



浦山さんとじゃれ合うラッキー



1998年 新事務所落成



井出さん、大畑先生、鈴木社長（故人）ら



ご挨拶後 スバルと書かれた工場跡で宴会へ



瀬下さん、上月さん、伊藤さん、伏見さん



佐藤さん、中山さん、及川さん



坂井さんご夫妻 浦山さん 米田さん



現社長 高橋、織田、田辺、斉藤、斉藤さん



浦山奥様、坂脇奥様、坂井さん、阿部君
後方、白黒くす玉は、浦山ご夫妻（左）の
手作りでした



若奥様?の面々 皆若い!



初々しい佐久間君と川端奥様



小野寺さん 片岡さん



石本さん 後方は移動式回転すしバス



斉藤さん 笠原さん 背中は故細田さんです。公私に渡りかわいがってもらいました



一開業 仲間たち

その後も口蹄疫や BSE など大きな風雨もありましたが、山下、阿部、佐竹など次々と入ってくる優秀でだれもが自分より背の高い獣医師に支えられ今日に至りました。また、帰国後多くの志を同じくする獣医師仲間巡り合うこともできました。三好、鈴木、山本、渥美、齋藤先生、少し若くなって芦沢、新

田、濱田、清水、大城、石井、安富先生ら多くの開業勉強仲間に出会えたことは、この上ない宝となり、ここに上げることができなかつた多くの「戦友」に心からの感謝を申し上げます。今後もよい年を共に過ごせればと考えています。また、各メーカーやディーラー様らと一緒に勉強し、時に苦勞したことも今となっては本当によい思い出でなっています。本当にお世話になりました。



一人が三人に



三人が四人に



少しずつ、人が増え・・・
今はもっと多くなり、30名ほどへ（THCS含む）



獣医勉強仲間と何度も何度もアメリカへ
鈴木、渥美、山本、中田先生と



いつものメンバーと鷺山さん



ウイソコンシン州立大 繁殖フリッキー先生
前列 村上、三好、新里先生
後列 河澄、川崎、鈴木先生
鈴木先生の上と下、頭が黒から白に・・・



若い勉強仲間も増え始め・・・

—最後に

最後になりますが、THMS の本当のボスである米国ウイソコンシン州 トータルハードマネージメントサービスの Andrew Johnson 先生に深い敬意と感謝を申し上げます。

長く顧客となり、いっしょに苦労を重ねてくれた酪農家の皆さんに深い感謝とこれからの益々の発展を心よりお祈り申し上げます。そして、そこに THMS の獣医師、授精師、培養師、事務員、トータルハードカーフサービスの職員がより強く貢献していける会社になれることを望んでお礼の言葉に変えたいと思います。長く本当にありがとうございました。

(株) トータルハードマネージメントサービス
代表取締役 会長として 黒崎尚敏



1998年 解体直前、事務所前で社員全員での記念写真

“Nothing Challenge Nothing Gain !!”